第六章　脱出の朝

1

萠黄はじっと壁を見つめていた。

いつ目が醒めたのか覚えていない。気がつくと驚くほどの充足感が身体に満ち満ちていた。

――なんてすがすがしい気分。おとついまで不眠症に悩まされてたのが嘘みたい。必死で逃げ回ったせいで疲れたからやろか。

カーテンの隙間から差し込む光が、壁の上に小さな陽だまりを作っている。雨戸の外に植えられた植物のせいだろう、陽だまりは段だら模様を描きながら、ゆらゆらと揺れている。朝だ。

――この世界がすべて作り物やなんて。

向かいのソファでは、むんがすやすやと寝息を立てていた。

彼女もまた作り物――。たった二日前に生まれたばかりの人間。それは桁外れに衝撃的な事実だったが、昨日は衝撃的な展開があまりに多過ぎた。おかげで感覚が麻痺してしまった。あれよあれよという間に一日が終わっ

てしまった。
でも、むんはむんだ。かけがえのない親友だ。たとえ〝ヴァーチャル〟であっても、萠黄の知るむんと同じように、笑い、励ましてくれる。
床の上には、ふたりの男が身を横たえている。タオルケットをかぶり、カブトムシの幼虫のように丸くなっている伊里江。そして揣摩は軽く鼾(いびき)をかきながら、へその辺りをぼりぼり掻いている。
（まるで友達同士で海の家に遊びに来たみたい）
萠黄は吹き出しそうになり、口を押さえた。
昨日のことを思い出せば、もっと緊張感があっていいはずなのに……。映画や小説と違って、現実はこんなものなんだろうかと萠黄は思う。
頭を起こして時計の針を見る。午前七時半？　いや裏返しだから五時半だ。
Tシャツを上げて、胸の辺りを確認する。銃弾の跡は見えないくらい小さくなっている。
萠黄はソファを降り、リュックを持って静かに部屋を出た。家の中も外も物音ひとつしない。風雨は去った。怖いほど静寂な朝だ。
トイレで用を足し、顔を洗い、鏡を見ながらブラシで軽く髪をすく。
（この世界でも髪の毛は普通に伸びてくんかな？）

昨夜寝る前に、全員六時起床と決めた。まだ少し時間がある。
萠黄は階段を昇って二階に上がった。南向きの一室で出窓が朝陽を招じ入れていた。
（今日は快晴やね。逃げるには不向きかなぁ）
まあそれはみんなが起きてから考えよう。
萠黄はリュックから携帯を取り出した。
「あれ？」
液晶画面を覗き込んだ彼女は目を丸くした。電源がオフになっていたのだ。
消した記憶などない。何かの拍子で押したのだろうか。
彼女はあわてて電源を入れた。ピアノのアルペジオがスピーカーから鳴り響き、携帯は眠りから目覚めた。
「モジ、おっはよー」
画面に向かって呼びかける。しかし返事はなかった。
（なによ。いつも《なんや⁉》やの《うるさいのー》やの、すぐ生意気な返事するくせに）
「モジ～、どないしたん？」
萠黄は携帯に顔を寄せた。画面にはモジが好んで住む火山の噴火口が見える。もちろんＣＧによる映像だ。
「もしもし、モジさ～ん、怪獣の王、モジさま～」
猫なで声にもまったく反応がない。地鳴りの音がかすかにするだけだ。地鳴りはモジの世界の基本設定なので

不思議でもなんでもない。
昨日、マンションを出る直前に声をかけた時、モジは妙に具合の悪そうな様子をしていた。何か悪いもの（ウイルス）でも食べたんだろうか。
萠黄は過去の着信メールを確認した。五通のメールマガジンが届いていたが、ウイルスの跡はなかった。ついでに電話会社のサーバにアクセスして過去の履歴を確認してみた。影響を受けそうな不具合は発生していない。
そもそも萠黄の携帯は自作のワクチンソフトによってガードは万全のはず。とはいえ二〇一四年になっても日々進化を続けるウイルスの存在は脅威だ。安心は禁物である。
「モジ～、いいかげん出ておいでよ～」
スネてるのかな？　と思ったその時だった。
噴火口の映像がスルスルと動き出した。カメラ（視点）が移動しているのだ。そのまま山を離れると、画面は満天の星空になった。
（エッ……宇宙？　なんで？）
まぎれもなくカメラは宇宙空間を漂っていた。
やがて画面の中央にひときわ大きな光点が現れた。光点はぐんぐんと輝きを増しながら迫ってくる。
（彗星？　……違う、これは！）
光点は一匹の怪獣の姿をとりつつあった。

大きく左右に広げた翼。
大蛇のようにのたうつ三本の首。
金色に光る身体。
「キングギドラ!?」
まさしくそれはゴジラの宿命のライバル、キングギドラだった。

2

巨大な翼を広げたキングギドラは、じつに優雅に宇宙空間を飛翔していた。
（ようできたアニメーションや）
萠黄は素直に感心した。
モジを作った時、萠黄は参考のために昔の東宝怪獣映画をすべて観た。映像を何度も静止させ、怪獣たちをスケッチした。ゴジラも描いたしキングギドラも描いた。だから彼女には判った。このキングギドラの映像を作った人は、かなりコアなファンだ。
ＰＡＩのような携帯の組み込みキャラはデフォルメされたものが主流だ。だからこれほどリアルなものは最近では滅多にお目にかからない。
キングギドラはさらに近づいてくる。
しかしその姿が大きくなるにつれて、彼女の感動はし

だいに不審へと変わっていった。
巨大な図体を覆(おお)う金色の鱗(うろこ)。独立してうねうねと動く三本の長い首、ドラゴンを思わせる頭、ギロリと睨(にら)む真っ赤な目、鋭く尖(とが)った角、大きく裂けた口からはてらてらと光る長い舌が出たり入ったりしている。
（携帯レベルにしては、造りがマニアック過ぎる）
（これで対話的(インタラクティブ)な動きを見せられたら驚きやけど、録画映像ならあってもおかしくはない）
（そやない！　わたしの携帯にこんなモンがまぎれ込んでること自体、そもそも問題やんか！）
混乱したが、萠黄はようやく核心にたどり着いた。
その間にもキングギドラは接近してくる。
そしてとうとう画面が金色でいっぱいになったとき、真ん中奥に位置する首の一本が、視線を萠黄に据えた。
（わたしを見てる！）
萠黄はそう確信した。
キングギドラは、いびつに並ぶ牙を光らせながら、初めて声を口にした。
《おはよう、萠黄さん》
萠黄は声にならない叫びをあげ、携帯を手から放した。携帯は床に落ち、カタンコトンと音を立てて部屋の隅に転がった。
《乱暴だなあ。君の携帯だよ》

キングギドラの冷静な声が壁に反射して聞こえてくる。落ち着いた大人の男性の雰囲気を持つ声だ。深みがあり、余裕があり、映画の吹き替えなら無理なく主人公を担当できるだろう。とてもＰＡＩの声とは思えない。

《突然のことで驚かせてしまったようだね。ごめん》

三つ首の怪獣は詫びながら、携帯の外にその姿を現した。

立体映像として立ち上がったキングギドラは、液晶画面にいた時よりもさらに風格を感じさせた。キングギドラは周囲に金粉をまき散らしながら三つの首を萠黄の方に向けた。その動きは優雅な緩慢さといったもので、怪獣のスケールが途方もなく巨大であることを表現していた。

《ご挨拶が遅れました。――キングギドラです》

真ん中奥の首がぺこりと前に垂れる。しかし動かない左右の首に気づき、顎でそれぞれの首筋を叩くと、左右の首も彼にならって頭を下げた。その様子があまりにコミカルだったので萠黄は少し緊張がやわらいだ。

「あの……キングギドラさん、どうしてわたしの携帯にいるの？　そこにいるはずのモジは？」

《萠黄さんのＰＡＩだね。仲良くなろうと務めたんだけど、残念ながら聞き分けてもらえなくて、しかたなく今は眠ってもらってるんだ。でも手荒なことは全然してな

いから安心して。それからボクのことだね。――ボクは旅怪獣なのさ》
「たびかいじゅう？」
《ほら、旅烏（たびがらす）って言うだろ？　ボクは特定の携帯に縛られず、携帯から携帯へ、旅から旅の流れ者なんだ》
「そんなこと、技術的にできるはずが――」
《できるんだよ。ボクがその動かぬ証拠さ。動いてるけどね》
　キングギドラは咳払いした。したように見えた。
《携帯のセキュリティーは万全だと誰もが思ってる。自分の携帯の周囲には高い塀と鉄条網が張り巡らせてあって、ＰＡＩは絶対に飛び越えられないし、逆に外からの侵入も不可能だとみんな思ってる。だからＰＡＩは自分だけの友達で、最高に親密な話し相手になってくれる。何だって話せる。現実のペットみたいに首輪をちぎって逃げていくこともない。外部から盗み聞きしにくる奴もいない。すべての携帯ユーザーがそう思ってる。
　でもね。ネットワークでつながってる限り、超えられない壁なんてありえないんだ。破れないセキュリティーなんてこの世界にはないのさ。君の携帯の場合は特にハイレベルな鍵がかかっていたので外すのに苦労したよ》
　しゃべりながらキングギドラは、ゆらゆらと三つの首を揺らめかせている。しゃべっているのはずっと真ん中

奥の首で、彼の口の動きは話し言葉とぴったり合っていた。あらかじめ作られた動きではない。ということは、実時間表示（リアルタイムレンダリング）を可能にするため、裏で高速な３Ｄ演算を行っていることになる。萠黄の携帯はメモリを最大限に増設していえるとはいえ、モジのプログラムが大部分を占めている。もし――仮にモジが削除されてしまったのだとしても、やはり携帯の能力を超えているのではないか？　単純に暗算しても、萠黄にはそういう結論しか出てこない。

《なんだか考え込んでるみたいだね。でもそんな暇はないよ》

「？」萠黄は思考を中断して顔を上げた。

《敵がこの家に迫ってる。早く逃げた方がいい。ボクはそれを伝えるために出てきたんだ》

「敵って？」

《忘れたのかい？　昨日君たちを襲った連中さ》

萠黄の脳裏に昨日の恐怖がよみがえった。

「ど、どうして――もう発見されたの？」

《だって君はさっき、この携帯でセンターにアクセスしただろう？　敵は法律も常識も無視して君を追いかけている。敵はＧＰＳ衛星をハッキングしていて、君の居場所が判ったらすぐ知らせる仕組みになっているんだ。すでに敵は近くまで来ていると考えるべきだね》

3

萠黄は床に着いた膝を上げ、出窓のそばに近寄った。まだ新品同様のレースのカーテンに手をやり、隙間から外の様子をうかがう。

目の前にもう一軒、別のモデルハウスが建っている。近鉄の線路はそのまた向こう。電車はもう動いてるのだろうか。朝陽を浴びた駅舎の屋根がかろうじて見えるだけで何とも言えなかった。

窓から見渡せる範囲には、動くものの姿はない。

「ホンマに敵が近くまで来てるの？」

《君がアクセスしたのが七分前。早ければ数分以内に対面できると思うよ》

その時、萠黄の耳がヘリコプターの羽ばたく音を聞いた。パタパタパタパタパタパタ。

「判った」

萠黄は決断した。

壁際に近寄ると、転がっていた携帯を拾い上げた。キングギドラは《幸運を祈ってるよ》と言って携帯の中に消えた。

時刻は五時五十分。

萠黄はリュックを背負うと、階段を飛ぶように駆け下

りた。
「みんな起きて！」
萠黄は大声で呼びかけた。むんががばっと跳ね起きた。
「どないしたん？」
「敵が来る」
「敵が？」
むんはすぐに身繕いを始めた。さすがに俊敏だ。伊里江も身体を起こそうとしている。しかし彼の手足は昨夜から縛られたままだ。
「うーん、まだ早いよー。営業は九時からだって」
揣摩太郎は寝ぼけた声を返した。
「ホンマやねんて。お願いやから起きてください！」
嘆願する萠黄の両肩を、むんが抑える。
「萠黄、説明してよ。どうして敵が襲ってくるって判ったん？」
「わたしが悪いねん。わたしが携帯からセンターに接続したから、それを敵がＧＰＳ衛星を使（つか）て、わたしらのいる場所を特定されてん」
「えーっ」それを聞いて揣摩も目が覚めたようだ。
「……ありえますね」横から伊里江が割り込んだ。「敵がＧＰＳ衛星を押さえているとしたら可能です」
「お前の言ってたことと矛盾するじゃんかよ」揣摩がすかさず口を挟む。「ハッキングできる天才は自分と萠黄

さんぐらいなものだって豪語してたのは誰だっけ？」
伊里江は一瞬目を閉じたが、すぐに開くと、
「……そうか、政府が敵であるならば、今やこの国のあらゆる機関はすべて敵側と考えるのが妥当でしょう。ならばＧＰＳ衛星を敵側に押さえられたとしても不思議はありません。ゆえにわざわざハッキングする必要もないわけです。敵は衛星から堂々と個人情報を引き出せるのですから」
「げっ、それじゃあ携帯が使えないじゃないか」
「……迂闊（うかつ）でした。もっと早く気づくべきだった」
感情の乏しい伊里江が歯ぎしりした。手が自由だったら自分の頭を殴るぐらいはしたかもしれない。
「……でも揣摩さんが心配する必要は全くありませんよ。ターゲットは萠黄さんだけですから」
「……」
リビングに沈黙が降りた。
狙われているのは萠黄ただひとり。それは全員が知っていて、触れずにいた事実だ。
「それは」揣摩が両手でテーブルを叩いた。「それはそうだけどさ、お前だってリアルとかだろ？　バレたらやっぱり狙われるじゃないか」
「……いずれは。でも今は大丈夫です」
「よーし、じゃあ俺が迷彩服どもに突き出してやる。お

前のTシャツにデッカく『アイム・リアル』って書いてな」
「やめなさい。喧嘩してる場合やないでしょう」
むんが揣摩の鼻息を押しとどめた。
「あ、ヘリが――」
萠黄のつぶやきに三人は耳をすました。パタパタパタパタパタパタ。きわめて近い。ヘリは旋回モードに入っていて、この辺りを上空から監視しているのだ。
「逃げよう」
むんは言うと、床に両膝を着いて伊里江の手足を縛ってあるタオルを解きにかかった。揣摩は不服そうだったが、あえて何も言わず、テラスに向いたサッシを開いた。雨戸を細めに開けて外を盗み見ている。
伊里江を解き終わったむんは揣摩の後ろから外をうかがった。萠黄もしゃがんでむんにならう。
「植木が邪魔だな。取り囲まれてても全然見えないし、手榴弾でも一発放り込まれりゃおしまいだぞ」と揣摩。
「悪い方に考えないこと。障害物があったらわたしらも逃げやすいし」とむんが言う。
「逃げるって、どこへ」
「それは――」
誰にも判らない。彼らは途方に暮れた。
「みんな、先に逃げて」萠黄が言った。「わたしが敵を

引きつけておくから。ほら、わたしって不死身やし」
揣摩もむんも目を丸くして萠黄を見た。
「スーパーマンじゃあるまいし、そりゃ無理だろう」
「どうなの？」むんが伊里江に訊ねる。
「……誇大広告でしょうね」彼は真顔で答える。
「とにかくここにいてはダメなんだ」揣摩が叫ぶ。「せめて隣の家に移動しよう」
全員が賛成した。と、その時、
《お取り込み中ごめんなさ～い。お電話よ～》
ウランの背伸びした子供声が割り込んだ。
「誰からだ？」
揣摩がポケットから携帯を取り出した。
《柳瀬サン》
「つないでくれ」
《――ああ、タロちゃん。娑婆（シャバ）の空気って美味（おい）し～》
液晶画面の上に、萠黄も見覚えのある人間の頭部が現れた。揣摩のベンツを運転していたマネージャーだ。
「柳瀬、警察署から出られたのか？」揣摩が問う。
《そう。ようやく解放されたのよー。無罪放免、無事釈放。いま署の駐車場にいるんだけど、警察の皆さんムチャクチャ忙しそう。私なんかに関わってられないって口ぶりだったー》
「よかった」揣摩はホッとした声を出した。「柳瀬、出

たばかりで申し訳ないけど、大至急迎えにきてくれ。悪い連中に追われてるんだ」
揣摩は現在地を柳瀬に説明した。
《絶体絶命？》
「ああ、人生これ以上ないってくらい絶体絶命だ」
《私の助けが必要？》
「そうだ。もはや君だけが頼りだ」
《了解！　すぐ駆けつけるー。待っててー》
テンションの高い電話は、不思議な余韻を残して切れた。

4

「変わった人やね」
むんは自分のバッグを背負いながら言った。彼女のバッグは側面のポケットからショルダーベルトを出すとリュックになるという優れものだ。
「そんな言葉、柳瀬には聞かせないでくれよ」揣摩が携帯を仕舞いながら答える。「ああ見えて彼は傷つきやすいんだ。昔、特撮もののヒーローをやってたことがあって、それが彼の唯一の自慢でね。今でも大仕事をする際には当時のことを思い出しながら気合いを入れるんだ。彼一流のスタイルなんだよ」

萠黄はベンツの運転席にいた柳瀬を思い出そうとしたが、彼の後頭部しか思い出せなかった。柳瀬の頭の中にはきっとヒーローを演じていた頃の晴れ姿が焼き付いているのだろう。それが過去の栄光だとしても彼は何度も頭の中で再生することで、現実を前向きに生きる糧にしている。素直にうらやましいと思う。自分には今のところ取り柄も何もない。

「おーしそれじゃ急いで、逃げる計画を立てよう」

揣摩は壁に貼ってある住宅会社のポスターをはがすと、裏向けにしてテーブルの上に広げた。そしてペンスタンドからマジックペンを拝借すると、周辺の見取り図を手早く描き始めた。

「ここが我々のいるモデルハウスだ。西側は狭い庭をはさんですぐ道路に面している。普通に出て行くならこちらだが一番危険でもあるだろう。

南側は一段下がった土地で、別のモデルハウスが建っている。玄関を出るとその家の横を通って、近鉄線に平行して走る道路に突き当たる。ちょっと遠いな。

東側は園芸会社らしくて壁が立ち塞がっていて、突破するのはまず無理だ。

したがって北側、これが我々の進む方向かと思う」

揣摩は絵を描く手を休めず、てきぱきと説明していく。昨夜、買い出しの時に辺りを観察していたのだろう。さ

すがダ・ヴィンチのリーダーだけのことはある。
「北側は民家が建っている。丈の高い植え込みが並んでいたので中はうかがえなかったが、庭のある和風家屋だ。さいわいこの隣家との段差は低く、植え込み以外の塀はなかったので逃げ込むにはもってこいだ」
揣摩はマジックペンで北側の土地の真ん中に太い矢印を描いた。矢の先端は隣家を貫いて、その先の道路に至っている。
「ご異議ある？　エンジェルたち」
むんも萠黄も首を横に振った。伊里江は他人事のような顔をして絵に見入っている。
「よし、すぐ北に移動だ」
四人は手に手に荷物を持つと、リビングを後にした。
「エリー、変な真似はするなよ」揣摩が念を押す。
「しませんよ」伊里江は表情の乏しい声で答えた。

奈良市内某所に停められた装甲車の中。
暗い室内に、壁にかけられた液晶画面だけが自己主張している。まるで夜道の自動販売機のように。
俺は夜が好きだ。真っ暗な夜が好きだ。身体が溶けていき、夜と同化できるから好きだ。だから子供の頃は夜空ばかり眺めていた。俺の育った田舎は夜空が綺麗だった。何時間も草の上に寝転がって眺めては、いつかあの

漆黒の宇宙に行くんだと心に決めていた。宇宙飛行士になるのが夢だった。なのに。

《真崎隊長代理、見えてますか？　赤いカーソルの付いた家が、光嶋萠黄の携帯の発信元です》

スピーカーを通した声が叫ぶ。

「ああよく見える。だがもういい。ヘリを遠くへやれ。朝っぱらから騒々しい音を立てていては、またどんな邪魔が入るか判らん」

そう言うと、真崎は手の中のマイクを口に持っていき、

「現在、張り付いているのは何名だ？」

《二名です》別の声が答える。

「よし、先行の二名に告ぐ。あと十名が五分後に到着する。それまで監視を怠るな。屋内から出ようとする者がいたら、例外を認めず撃て」

萠黄と伊里江は、ダイニングテーブルの脇で佇(たたず)んでいた。むんは椅子に腰掛けている。三人の目は揣摩の背中に注がれていた。揣摩は勝手口に降りて、扉の中央に穿(うが)たれた覗き穴から外の様子をうかがっている。

北向きの窓は朝の光で満ちていた。窓ガラスは一面に緑色を映していた。隣家の植え込みだろう。この辺りは南から北に向けて昇り斜面になっている。当然段差がある。逃げ足以外の体力が要りそうだなあと萠黄はため息

をついた。
むんが同じようにため息をついた。萠黄は彼女を見た。むんも萠黄を見て力のない微笑を浮かべた。
「疲れた？」と萠黄は訊ねた。
「うん、明け方まで寝つかれへんかってん」
むんは動きやすいように長い髪を後ろで束ねていた。リスの刺繍（ししゅう）をあしらったお気に入りの髪留めを付けている。彼女のＰＡＩに似てなくもない。
髪を上げたむんの頬には疲れが色濃く見てとれた。伊里江の語った真相がむんに落とした影は、萠黄の比ではないようだ。
萠黄は背中からむんの首に両手を回した。
「むん、ここを出たらアイスクリームをイヤって言うほど食べよ」
「うん」
――ガチャッ。
揣摩が内鍵を外した。ノブを回して扉をそーっと開き、隙間から顔を覗かせる。
「大丈夫そうだ。俺が先に行くから付いてきてくれ」
そう言って一歩足を踏み出したとき。
ボスッ、ボスッ。
鈍い音が起こり、扉の内側に穴があいた。
揣摩は、うわっと叫んでその場にうずくまった。

5

「何だ、あいつは？」
真崎は顔をぐいっと前に突き出した。液晶スクリーンには先行隊員の帽子に仕組まれたカメラ映像が映っている。彼らの監視するモデルハウスの勝手口が大写しになっていた。
つい今しがた、開けられた扉から顔を出した者がいた。身長のある若い男のようだった。それに対して隊員は命令どおり発砲した。銃弾は逸(そ)れ、男は中に引っ込んだ。
真崎は映像のリピートを指示した。画面上に別のウィンドウが開く。
「なるほど、奴が逃亡の手助けをした男か」
昨夕、近鉄電車の前に飛び出した人影がいたとの報告があった。人影は長身の男が抱えるようにして連れ去ったという。
「モデルハウスに潜んでいたとは、考えたものだ」
リピート映像には画像処理が施されていたが、暗過ぎて人相を見分けることはできなかった。
（誰でもいい。まとめて始末するだけだ）
「隊長代理、光嶋の携帯の反応が消えました」地図データの画面を睨んでいた部下が声を上げた。「また携帯の

電源を切ったようです」
真崎は顎に手をやった。
（我々が特殊な衛星を用いて、ＧＰＳ機能のない携帯でも追跡できることを知っているのか？　電源が切られていれば追跡不可能なのだが……まさかな。知っていればおおかた充電器を持ち合わせてないので節電しているのだろう）
「気にするな」真崎は部下に言った。「時間がかかったが、これで光嶋萠黄は袋のネズミだ。片付き次第、次のリアル候補を追うぞ」

「――なんで俺が撃たれなきゃならないんだ？　奴ら、正気じゃない」
床に倒れ込んだ揣摩はハアハアと息を弾ませながら、自分を撃った敵を激しく非難した。萠黄とむんと伊里江が彼を取り囲んでいる。
「……どうやら敵は、この家に隠れている者すべてを標的と考えているようですね」
伊里江が勝手口の銃弾の痕を見ながら言った。扉はドアクローサーによって元通りに閉じられていた。
「どうしよう。逃げられへんよ」と萠黄はむんを見た。
「これじゃ柳瀬さんの車が来ても……」とむん。
「柳瀬！」大の字の揣摩が吠える。「くっそー、せめて

柳瀬が警察を引っ張ってきてくれりゃあなぁ」
「警察？　でも警察だって敵に通じてるかもしれないでしょ」とむん。
「そうとも限らへんよ」萠黄が反論する。「昨日、応対してくれた警部さんは優しい人やったし」
「……末端までは染まってないかもしれませんね」と伊里江。
「電話してみよか」むんが立ち上がる。
「その前に敵が突入して来たら？」萠黄が危ぶむ。
「下手すりゃ、爆弾一発で俺たちはお陀仏かもしれないぞ」
「そんな――」
「……爆弾」
伊里江が考え込む姿勢を取った。
「どうかした？」
むんが伊里江の顔をうかがう。
「……あの、私に考えがあります。いささか常軌を逸した提案ではありますが」

《後続隊が到着しました。指示を待ちます》
スクリーンには隊員たちのカメラ映像が並んでいた。真崎はすべてに目を走らせる。勝手口の他に、玄関、庭先など、猫一匹這い出る隙間のない鉄壁の包囲網。さら

に屋根伝いに隣家に逃げ込むことも想定して、北側の民家の屋根にはスナイパーを配置した。
あるカメラは道路越しにモデルハウスを見つめていた。人通りはない。通勤の時間帯にはまだ間がある。早朝で良かったと真崎は思った。
「この車はどれぐらいで到着する？」
真崎はインターフォンで運転席に訊ねた。
《あと十分ほどです》
「よしっ」真崎は包囲する隊員たちに通じるマイクを手に持った。

チチチチチ。
電線に止まった小鳥が高らかに啼いている。静まり返った住宅地のなかで、その声はひときわ鋭く、辺りに響き渡った。
ひとりの隊員が電柱の陰に身を隠していた。服装は怪しまれないよう、わざと平服を装っている。
「了解」
真崎の命令を聞いた彼は一歩前に出た。
右足がアスファルトの路面に着くか着かないかという瞬間だった。見つめていた窓ガラスが突如砕け散り、激しい轟音と共に、真っ赤な炎と灰色の煙が彼に向かって押し寄せて来た。

「ぐわっ」
逃げる余裕はなかった。彼の身体は炎に包まれた。

6

予期せぬ炸裂音は真崎の耳にも届いた。マルチウィンドウのひとつが猛り狂う炎で覆われると、ブツッという音を残してブラックアウトした。
「太田！」
呼ばれた隊員からの応答はない。真崎はしばし呆然としたが、すぐに他のウィンドウに視線を移した。どの映像もモデルハウスから吹き出す炎や煙を捉えている。
《報告します！　ターゲット潜伏中の家で爆発がありました》
「爆発だと？　攻撃されたのではなかったのか」
ウィンドウの映像はどれも激しく動いている。隊員たちが動揺している証拠だ。真崎は全員に距離を取るよう命じた。
映像で見るモデルハウスはひどく損傷していた。二階部分は三分の一ほどが吹き飛んでいる。窓ガラスはことごとく割れ、そこから吹き出す炎が、庭の植え込みなどに燃え移っている。
《ガスのにおいがします。爆発の原因はこれかと思われ

ます》

（――そういうことか）

真崎は拳に爪を食い込ませた。

中に立てこもる光嶋萠黄一派（何人かは不明だが）はガス管を開き、引火させてあの爆発を起こしたのだ。それは退路を断たれて自暴自棄になったからではなく、あくまで逃亡するための一作戦だ。おかげで我々は容易に近づけなくなり、逆に周囲の住人の注意を引きつけることができる。人通りの少ない早朝だからこそ連中を包囲しやすかったのだが、野次馬に出てこられてはやりにくくなる。彼らはそう踏んだのだろう。頭のいい連中だ。

しかしそうは問屋がおろさない。爆発音に叩き起こされた付近の住民が表に出てくることを期待しているのだろうが、住民たちが昨夜の政府発表のニュースを見ていれば、ひとりも出て来たりはしまい。人ごみに混じって逃げるつもりなら、おあいにく様だ。

とは言え――中にいた連中は無事なのか？

火の勢いはますます増しつつある。

真崎は再びマイクを取り上げた。

「全員に告ぐ。消防車や警察がやってくる前に、一気にカタをつけたい。おそらく連中は被害を避け、爆発箇所から最も離れたところに身を隠しているものと思われる。各自現在の位置から突入を試み、ターゲットの発見に全

力を尽くせ」
了解という声が次々に返ってきた。
「それから」真崎はためらいがちに付け加えた。「くれぐれも怪我はしてくれるな。君たちは私の部下だが、元の世界を守りたいという共通の思いで参集した同志だ。先は長い。数は少ない。命を粗末にするな」
《真崎さん、いや隊長代理》ハスキーヴォイスがくだけた口調で彼の名を呼んだ。《アンタらしくもないな。俺たちは皆よく判っている。気を遣わんでもいいさ》
「すまん、岩村」
真崎は口許からマイクを離した。

（……収まったみたい）
萠黄はくるまっている布団から顔を出した。
そこは和室の押し入れの中だった。ダイニングから一番遠い部屋ということで、ここに逃げ込んだのだ。
「向こうは燃えてるみたいや」
身を寄せるように同じくくるまっていたむんも顔を出す。ふすまを少しだけ開いて外の様子をうかがっている。
萠黄はもうひとつの布団に手を伸ばした。
「起きてますかぁ？」
「寝るわけないでしょっ」布団が跳ね飛ばされ、中から揣摩が現れた。「ぶわーっ、夏に冬物はキツイぜ」

確かに萠黄の顔にも汗がしたたり落ちている。
「エリーさん、戻ってきた？」
萠黄の問いに、むんは首を振った。
「なあ、そろそろ出ないか？　さっきの音に驚いて、そろそろ野次馬が集まり出してる頃だと思うぞ。逃げるなら今だ」
「そうやね」むんも賛同する。
三人はふすまを開き、そーっと畳の上に這い出した。

伊里江が自分に考えがあると言って披露した作戦は、意図的にガス爆発を起こすという、きわめて危険なものだった。
伊里江は提案するや、すたすたとキッチンに近づいてガスのコックを開いた。シューッという音と共に特有のにおいが広がり始める。
「ところで、どうやって引火させるんだ？」
揣摩が当然の質問を口にした。
「……言い出したのは私です。私がやります」
事もなさげに伊里江が答える。
「アホな。ライターでも擦った途端、ドカンといくんやで」とむん。
「……知ってます」
じゃあどうやって、と三人が問いただすと、彼はただ

片手を上げてこう答えた。
「……私も〝リアル〟です。きっとそれが私の身を守ってくれるでしょう」

7

この人はどうしてこんなに淡々としているのだろう。
萠黄は唖然とするどころか、感動さえ覚えた。
「……銃で撃たれるのも、ガス爆発の只中にいるのも、さして違いはありませんから」
伊里江が言うと、そんなものかなと思えてくるから不思議だ。いったいこの人の感情回路はどうなっているんだろう。恐怖を感じないのだろうか。自分には無理だ。
『私が敵を引きつけるから』などと勢いで大見得を切った萠黄は、自分が恥ずかしくなった。
「まあ、この世界の事情をよく知ってるお前さんがそこまで言うのなら……」
揣摩も何か発言しなければと思ったらしいが、考えがまとまらず、語尾が消えてしまった。
「……時間がありません。あなたたちは急いで安全な場所に隠れてください。救助隊が来たり、周囲が騒がしくなるまで出て来てはいけませんよ」
「あなたは……どうするの？」むんが訊ねる。

「……むざむざ火傷を負うつもりはありません。頃合いを見計らって逃げますので」

三人が隠れていた和室の出入口には大きな座敷机が立て掛けてある。気休めだが、延焼の火の手が伸びてきた時の防火扉の代わりだ。

座敷机の裏に背中をもたせかけた揣摩が、ダイニングの方角に聞き耳を立てる。むんも萠黄も彼にならって、畳の上に正座したまま神経を集中させた。

ぱちぱちと火の爆(は)ぜる音が遠く聞こえる。

「さっきのドーンっていう音」揣摩がささやく。「俺、心臓が止まるかと思ったよ。コックを回してから五分ぐらいしか経ってないのに、あんなに派手な音がするなんて予想してなかったな。家全体がグラグラッと来ただろう？　あれには肝を冷やしたよ」

「ガラスの割れる音もスゴかった」と萠黄。

「ドラマならまさに《良い子は真似しないでね》の世界だな」揣摩は軽口を叩きながらも顔付きはいたって真剣だ。「さてと、この机を動かすとするか」

漆塗りの座敷机は大変重く、揣摩がいなければ立て掛けることもできなかっただろう。

和室唯一の出入口は、真っ白な和紙を貼った障子が二枚。ほんの少し、焦(こ)げ痕が見られる程度である。揣摩は

音もなくそれを開くと廊下に出た。ふたりも後に続く。
廊下は途中でL字型に曲がっている。角を折れた三人は、その場に立ちすくんだ。
廊下の壁は激しく歪み、ひび割れ、あちこちに黒い焦げ痕があった。足許には木片や割れたガラスなどが散乱し、フローリングの床はほぼすべてのタイルが剥(は)がれ、あるいは反り返っていた。三人は靴を履いたままだったので、そのまま廊下を進んで行った。
「エリーさん！」
むんが真っ先に伊里江を発見した。彼はダイニングと廊下の境に座り込んでいた。
萠黄にはそれが伊里江だとすぐには判らなかった。Tシャツは燃え落ちて首の周囲にしか残っておらず、ジーンズも腰回りを残すだけ。露出した肌は煤(すす)で真っ黒で、これが火事場なら捨てられたマネキン人形と思ったかもしれない。
「おい、エリー！」
揣摩も走り寄ると、伊里江に恐る恐る手を触れた。するとまるでスイッチが入ったように伊里江の肩がピクッと反応し、真っ黒な顔の中で両目が開いた。
「……大丈夫です。生きてます。……早く逃げてくださいよ」
むんはポケットから取り出したハンカチで伊里江の顔

を拭った。不思議なことに火傷の跡はまったくなかった。
「あなたを置いて行けるわけないでしょ」
むんは伊里江の頬や首筋を拭い続ける。萠黄も膝をついて伊里江の尖った顎(あご)を見つめていた。
「それにしても」揣摩は口笛をヒューッと吹いた。「台風一過って眺めだな」
ダイニングは、小型台風がいかんなく猛威を振るったとでもいうような様相を呈していた。
(でも――)
「ガス爆発って、こんなになるものか?」
萠黄の疑問を揣摩が代弁した。
窓ガラスはことごとく吹き飛び、ひっくりかえった椅子やテーブルは瓦礫(がれき)となって部屋の隅で煙を上げている。カーテンもカーペットもまだ燃えている。しかし天井があらかたなくなって空に浮かんだ雲まで見えるのには三人とも声を失った。二階が消えていたのだ。
壁も半分ほどがむしりとられており、鉄骨が露出している。シューッという音が続いているのは、依然ガスが漏れ続けているからだろう。においはしない。壁がなくなって風通しが良くなったせいだ。
「あそこ――」
むんが鉄骨の一本を指差した。東側のテラスに面した壁の中にあったと思われる。それがロウ細工のように途

中でぐにゃりと曲がっていた。
ガシャッ。
鉄骨の向こうに人影が立ち上がった。迷彩服だ。
「しまった！」
揣摩はあわてて背中の拳銃――伊里江がもっていた銃だ――に手をやったが、
「動くな」
扉のなくなった勝手口に姿を現した別の迷彩服が低い声で揣摩を制した。大きな男だ。重そうなマシンガンを片手で構えながら近づいてくる。
万事休す――。萠黄はまぶたを閉じた。

8

勝手口からのっそりと上がってきたのは、岩のように盛り上がった筋肉をもつ大男だった。
「子供がこんなモンで遊んじゃいけねえ」
岩男（いわおとこ）はそう言うと、揣摩の手から拳銃を取り上げた。
「座れ」
洞窟の奥から聞こえてくるような声だった。揣摩は悔しげな表情で床に腰をおろした。萠黄とむんは伊里江をはさむ格好で最前から膝をついている。
「他には誰もいないようだな……。山崎、外に廻ってガ

スの元栓を閉めてくれ」
「了解」
最初に現れたほうの男が、マシンガンを肩に乗せて出て行った。どうやら岩男がこの場のリーダーらしい。岩男は揣摩たちから視線をはずさず、ヘルメットのマイクに話しかけた。
「こちら岩村。男ふたり女ふたりを拿捕しました」
手短に連絡をすませると、岩村はダイニングの惨状を一瞥し、全身煤だらけの伊里江に目を顰めた。
「そこのボロボロの兄ちゃんがやったのかい。騒ぎを起こして人目を惹くつもりだったらしいが、残念だったな。戒厳令のことは聞いてなかったのか？」
「戒厳令⁉」
むんが驚きの声を上げた。
「どうやら知らないらしいな。昨夜、総理がマスコミを通じて発表した。『いま世界は未曾有の危機に直面している。人体が砂になるという原因不明の病気が蔓延しており、大怪我をすると命取りになる。だから危険な状況は極力避け、表に出ないことを勧める。現在、強力なワクチンを鋭意開発中であるから、パニックに陥ることなく静かに続報を待つように』とな」
萠黄とむんは顔を見合わせた。自分たちの逃亡中に、世の中は大きく動いていたのだ。

「まあワクチンと言っても」岩村は続ける。「そんなモノありはしない。真っ赤な嘘だ。そうでも言ってもらわないと俺たちのリアル捜索に支障をきたすからな」
「待てよっ」揣摩が噛みついた。「俺はダ・ヴィンチの揣摩太郎という者だ。聞いたことはないか？」
「知らんな」岩村は銃口を向けて答える。
「あのな、おっさん。俺は総理から直（チョク）に依頼を受けてる身なんだ。リアルの萠――人間を無事にある場所まで連れて行くようにとな。なのにお前らは殺すつもりで攻撃してきた。おかしいじゃないか」
「何をのんきに語り合ってんだい」
突然、背後で声がした。リビングから姿を現したのは、やはり迷彩服をきた若い女性だった。二十代半ばだろうか。背が高い。戦闘員の中に女性もいたとは。
「やっとお出ましか」岩村が答える。
「へ、他の部屋を調べてたんだよ」
家のあちこちから窓を突き破る音がする。二階にも侵入したらしく乱暴に床を踏み鳴らす音が聞こえる。
女性隊員は太い眉を動かしながら萠黄たちを睨みつけた。「どいつだ？　リアルちゃんは」
萠黄の心臓は縮み上がった。いよいよ殺される。むんと握り合った手に力を込めた。
「おやぁ？」

女性隊員は目を丸くした。
「どうした」岩村が訊ねる。
「こいつ……揣摩太郎じゃないか！」
「知ってるのか？」
「知ってるも何も、今をときめく超人気アイドルだよ」
「俺はＳＭＡＰしか判らん」
「古いねえ」
女性隊員は揣摩の前にやってくると、彼に話しかけた。
「あんた、本当に揣摩さんだろう？　ダ・ヴィンチの」
「そうだ」
揣摩は両膝を抱えて座ったまま、毅然として女性隊員の顔を見返した。
「うっそー、なんでこんなとこにいるの？」
「サキ、俺たちの本分を忘れるなよ」岩村が諌める。
「判ってるよ。――ねえ、揣摩さん、あんたもリアルなのかい？」
「違う。そこのおっさんにも言ったが、俺は総理からリアルを連れてくるよう直接依頼を受けただけだ。おたくらもそうじゃないのか？」
「山寺総理から？　確かにワタシもそうだけど」
「おい、サキ、そいつの口車に乗るな」
「黙ってな。――それで、リアルはどこに連れて行くつもりだったんだい？」

「それはもちろん……東京だ。総理はこう言った。彼女は俺のファンだから俺が誘えば疑いもせずについてくるだろうと」
「突飛な話だが、芸能界にも太いパイプを持つあの総理なら言いかねないねぇ」
「リアルを傷つけずに無事届ければ、礼をはずむという約束だ。だからその物騒なものを俺たちに向けないでくれ」
揣摩がサキのマシンガンを指した。
「でまかせだ。助かりたい一心で適当なことを口にしてるだけだ。俺たちは命令どおりリアルを殺す。考えを巡らせる必要などない」
「けどさ、こんな田舎に超アイドルがいるっていうのもおかしな話じゃないか。いちおう、ボスの到着を待ったほうがいいと思うよ」
「やかましい！」
岩村は叫ぶと、銃口を揣摩に突きつけた。
「おい、アイドル。光嶋萠黄ってのはどっちの娘だ？」

9

銃口が揣摩の眼前でゆらゆらと揺れる。
「言えばお前の命は助けてやる。言わねば四人ともあの

世行きだ」
岩村は本気だ。目が据わっている。
横に立つサキが短く刈った髪をかきながら、
「もうすぐボスが到着するんだ。そしたら検査機が使える。あわてることないじゃないか」
しかし岩村は聞く耳を持たない。
「片足だけ撃ち抜いてやろうか。ヴァーチャルなら傷口からみるみる砂になっていくぞ」
岩村の薄気味悪い笑みに萠黄は心の底から震え上がった。むんが砂になっていく。揣摩の身体が崩れていく。そんなもの見たくない。
「わ、わたしです」
萠黄はむんの手を振りほどいて立ち上がった。
「ほう」
岩村とサキの目が萠黄に集中した。
「見た目じゃリアルかヴァーチャルかなんて、まったく判別がつかないわね、これは」
サキがしげしげと萠黄の全身を観察する。
「お友達の三人を撃って砂になれば、消去法でこいつがリアルということさ」
岩村の言葉に、萠黄はぎょっとした。まさか本気で？
しかしマシンガンの銃口は再び揣摩に照準を合わせた。
「芸能界に戻って俺たちのことをとやかく発言されては

困るんでな。悪いが死んでくれ」
そこへぞろぞろと他の迷彩服たちが集まってきた。誰も岩村を止めようとはしない。くくくと笑う声さえする。絶体絶命だ。萠黄は観念した。自分が盾になれば、あるいは銃弾を跳ね返すことができるかもしれない。でもこれだけの包囲の輪を突破するのは無理だ。悔しい。でもここまでなのか。
サキが大きくため息をついた。
「やるならやればいいさ。ただし、ガス漏れをどうにかしてからのほうがいいんじゃないか？　今撃ったらエラいことになるぜ」
そうなのだ。ガスのシューッという排出音はまだ途切れていない。キッチンの上のガスコックは爆発で跡形もなく吹っ飛んでいる。さっき岩村の仲間が外に廻ったはずだが。
「おーい、山崎。まだ止められんのか！」
岩村の怒声に外から返事があった。
「誰か手伝ってくれ。二階から落ちた壁がじゃましてるんだよ」
「しょうがないな。岩隈、上原、手伝ってやれ」
「了解」
ふたりの迷彩服が外に向かおうとした時。岩村の目が萠黄たちを離れた、その時を待ち構えていたように、伊

里江はガバッと立ち上がった。
彼の動きを察して、岩村はすぐさま銃口を向け直す。
萠黄は反射的にむんに抱きついた。そしてそのまま岩村に背中を向けるようにして彼女を押し倒した。
伊里江は右手を横に力いっぱい振った。
同時にドンという銃声が谺(こだま)した。
銃弾は伊里江にも揣摩にも萠黄にも届かなかった。
伊里江の払った手刀によってはじけ飛んだのだ。しかも彼の手が空中に描いた弧は目映い光を放っていた。
背を向けた萠黄には見えなかったが、その場にいた誰もが、信じがたい光景に身体を硬直させた。
それが伊里江に幸いした。
彼は手のひらをひるがえし、身体を伸ばしながら指先を岩村に向かって突き出した。すると伊里江の手から光の鞭が現れた。光の鞭はビュンと空気を裂いて岩村のマシンガンを真っ二つに切断した。
「うわわっ」
何が起きたのか理解できないまま、岩村は両手に泣き分かれたマシンガンを交互に見比べた。
「燃えてるよ！」
サキの絶叫に顔を上げ、自分を指す指先に視線を落とすと、岩村はさらに仰天した。燃えない破れない素材で作られたはずの戦闘服の胸元が横一文字に裂け、燃え上

がっているではないか。
なぜだ――？
彼は壊れたマシンガンを手放すと、みずからテラスの外へと転げ落ちていった。
ダイニングでの騒動はそれで終わりではなかった。
伊里江はさらに両腕を重ねて縦横に振り回す。
床に倒れた萠黄とむんは首をねじるようにしてその様子を見ていた。揣摩は眼前に展開する光の芸術に、口をぽかんと開けたまま魅入っていた。
鞭は銃口を向けてくる岩隈と上原を真横に薙ぎ払った。
萠黄はあっと叫んだ。
迷彩服のふたりの身体は胴体から寸断され、床に転がり落ちた。鞭の勢いはそれだけにとどまらない。背後の壁をあたかもショベルカーが鉄の腕のごとく、バリバリと剥がしていく。剥がれた跡がパッと燃え上がる。
「バケモノめ！」
サキのマシンガンがついに火を噴いた。伊里江はわずかにのけぞったが、それでも腕を振り続ける。彼の腕と一体化した炎の鞭は、残った迷彩服たちに刃（やいば）を向けた。
（やり過ぎや！）
萠黄は思わず伊里江の足首をつかんだ。伊里江の姿勢は崩れなかったが、鞭はサキたちを逸れて、床に食い込み、迷彩服たちを残らず転倒させ、床下へと叩き落とし

た。
　萠黄は涙目を伊里江に向けながら哀願した。
「もういいよ。これ以上見たくない！」
　伊里江の能面は何も語らなかったが、彼は左右の腕を静かに下ろした。炎の鞭もすーっと短くなり、やがて消えた。
「……リアルの能力なんですよ。意識を集中させると物を操ることができる。私の操ったのは火ではありません。ガスです。ガスを紐の用に操れたんです。爆発の時にその能力に気づきました。おかげで――」
　彼は天井を見上げた。萠黄も見上げる。そうか、家をこんなに破壊したのは彼だったのだ。

10

――右と左。
――銃弾を跳ね返す身体と砂と化して崩れる身体。
――リアルとヴァーチャル。
――この世界に災いをもたらす存在と、それを殲滅せんとする存在。
　萠黄の両目から熱い涙がとめどなく流れ落ちた。彼女はそれを拭おうとしなかった。涙がオブラートとなって周囲の景色を和らげてくれるから。

それほど萠黄の周りは酸鼻（さんぴ）を極め、破壊の限りが尽くされていた。
萠黄の目の先には美麗なシステムキッチンがあった。今はその片鱗も見えない。落下した天井の一部がのしかかり、炎の熱でぐにゃりと曲がったステンレスの残骸がかろうじて見えるだけだ。
朝の陽光が眩しい光を萠黄の横顔に降り注いでいる。ダイニングの壁も天井も、その上の二階部分まで消えてしまっては陽射しを遮るものは何もない。キザギザに残る壁の端くれが、彼女の膝に複雑な影を落としていた。
涙越しに見る光景は、白く、幻想の世界のようだった。すべてが夢であったらと思わずにはいられなかった。しかし――。
血のにおいが彼女を現実の世界に呼び戻し、絶望の底へと突き落とす。
敵味方の区別なく、周りで次々と命が失われていく。望んでもいないのに別世界へと送り込まれ、重火器を携えた恐ろしい人間たちが命を奪おうと迫ってくる。
（わたしが何をしたというの!?）
萠黄は頭を垂れた。元の世界に戻りたい。元の自分の生活に戻りたい。何のとりえもない平凡な日々、鬱々としたあの日々に戻りたい。母やむんに迷惑をかけっぱなしで、テレビとパソコンがあればいい生活に戻りたい！

〝萠黄、どこも怪我はない？〟
むんの声が遠くでした。隣りの家のテレビ音声みたいに、あやふやでつかみどころのない声だった。。
〝揣摩さん、あなたは？〟
〝えぇ？　あぁ〟
〝もう、しゃんとしぃーよ。リーダーでしょ？〟
〝撃ち合いは終わったの？〟
〝まったく……部屋の真ん中にぼーっと座ったままで無傷やなんて信じられへんわ。運は百人前やね〟
〝……サイレンの音がします。たぶん消防車でしょうね。早く逃げましょう〟
〝揣摩さん、柳瀬さんに電話してよ〟
〝そうだった、ちょっと待って。しかし熱いな〟
〝火が燃え広がってるんよ。ここを離れるのが先決やね。萠黄、立って〟
〝……支えを失った二階はいつ崩れてもおかしくない状態です〟
〝もしもし柳瀬、待たせたな。すぐ来てくれ〟
〝萠黄、しっかり歩きなさい〟
〝……勝手口の方が外に出やすいと思われます〟
〝駅前のロータリーで待機してたんだな。そこからならすぐだ。北西に携帯ショップとケンタッキーがある。その間の道を進むんだ。この通話は切るなよ〟

〝落ちてきた屋根がうまい具合に逃げ道を覆ってくれてるわ。このまま裏に出ましょう〟
〝そうそうその道だ。……その辺りの様子はどんなだ？
……フンフン、なるほどね〟
〝どない言うてはる？〟
〝道路には結構人があふれてるそうだ。ガス爆発は無駄じゃなかったらしい。唐突な戒厳令とやらも我が国民の野次馬根性の前には形無しだ〟
〝植え込みの間から覗けるで――ホンマや、スゴい人だかり！〟
〝……遠巻きに見守ってますね。いま出て行くと目立ちますよ。どこかに隠れてる狙撃手に撃たれる可能性も〟
〝柳瀬さんの車もここまでは無理じゃない？　入って来れても、ヘタに出て行ったら私ら注目を浴びてまうわ〟
〝まかせてくれ。出待ちの追っかけファンを振り切るのには慣れてる〟
〝……不慣れな者もおりますので〟
〝ご町内の皆様、毎度お騒がせしております。奈良県警察でございます～〟
〝来た来た！〟
〝――あの声、もしかして柳瀬さん？〟
〝オフ・コース〟
〝だっさー。廃品回収やないんやから。しかも警察を騙(かた)

るなんて〟
〝俺の入れ知恵だ。非常時なんだから許されるさ〟
〝……接近してきますね〟
〝――ガス爆発による火災が発生しております。ガス漏れはまだ続いておりますので、皆さんくれぐれも現場には近づかないよう願います。ハイハイそこのボク、前に出ると危ないよ。ショッカーの怪人にさらわれちゃってもしらないよ～〟
〝あのバカ、デパート屋上でやってたヒーローショーの癖がいつまでも抜けないな〟
〝見えた。――ちょっとぉ、パトランプ回してるよ！〟
〝非常時だから……〟
〝……でもさすが元役者さんです。よく通る声ですね。うらやましい〟
〝柳瀬、そのまま植栽の前に横付けするんだ。――そうそうそこで停車！〟
〝……二階が〟
〝どうしたの。――アブない！〟

11

萠黄は火照った顔を空に向けた。その眼に二階の大屋根がバキバキと音を立てながら迫ってきた。一階の鉄骨

が折れ、耐えられなくなったのだ。
「戻れ！」
揣摩の叫びにむんも伊里江も敏捷に反応した。萠黄はむんの手に引きずられて、転けそうになりながらもどうにかついていく。
「潜り込め！」
さっきくぐり抜けた北屋根の残骸に、四人は頭から滑り込んだ。と同時に大きな音がして、大屋根は道路と植栽の上に落下した。
「しまった、柳瀬が、車が――柳瀬ぇ！」
揣摩が携帯に怒鳴る。耳を塞ぐウランの姿が液晶の隅に映っている。
「柳瀬さん！」
むんも脇から乗り出すようにして呼びかける。
《……ヒーローは……死なない》
「柳瀬、怪我はないか⁉」
これまで幾度、互いの怪我の有無を気にかけたことだろう。この世界では常に『怪我（イコール）＝死』のイメージがつきまとう。萠黄は頭痛を感じた。鐘を打ち鳴らすようにハンマーが脳髄を直撃し始める。
《私は無傷。車が守ってくれたのよ。そんなことより今がチャンス。急いで！》
「チャンスやて？」

むんが三人の顔を順繰りに見る。
「行ってみよう」
答えながら揣摩は北屋根の下を抜け出した。三人も後を追う。
道路には途方もない粉塵が舞っていた。火の粉がぱらぱらと降り注いでくる。目を開けているのが難しい。
「柳瀬！」
揣摩が携帯に向かって吠える。すると呼応するようにドアの開く音がした。煙が風に流れていく。
揣摩たちは息を飲んだ。焼け落ちた大屋根が車体の上に覆い被さっている。くすぶり続けるそれは、巨大な手が車を包み込んだようにも見え、ぞっとする光景だった。
「這い出せるか？」
揣摩が携帯に問いかける。
《その必要はなし。それよりドアを開けたから、乗ってちょうだい！》
揣摩は三人を振り返った。さすがにりりしい顔付きになっている。彼は軽く頷くと先頭を切って路上に飛び出した。間を置かず伊里江も続く。むんも萠黄の手を引いて植栽の隙間から道路に飛び降りる。
「早く！」
屋根の下では、柳瀬が開いた後部ドアに手をかけて四人の到着を待っていた。むんと萠黄が滑り込む。伊里江

が乗り込むと急いでドアを閉めた。
揣摩が柳瀬に続いて前部座席に転げ込む。間一髪でひしゃげた鉄骨がドアの前に落下した。
揣摩はヒューッと口笛を鳴らし、周囲に目を走らせた。まるで巨大な皿を伏せられたように、大屋根が前後左右を覆っている。偶然にもそれが目隠しの役割を果たしていた。
「よく潰れなかったなぁ。さすがベンツだ」
「つかまっててくださいよ」
柳瀬はギアを入れると、アクセルを踏み込んだ。車は屋根を載せたまま前進を始める。想定外の重量が車体のあちこちを軋(きし)ませる。
揣摩は舌打ちした。
「重過ぎてダメだ。屋根を下ろさないと」
伊里江が前方を指差した。
「……道の左にトレーラーが停まってます。あれに引っ掛ける作戦はどうでしょう？」
人混みに囲まれ、真崎の司令車は立ち往生していた。
「岩村たちと連絡はとれんのか!?」
怒りに身体を震わせながら、何度目かの同じ質問を部下にぶつける。
「ハッ、いまだ応答がありません」

くそっ。真崎は拳で自分の膝を叩いた。
こんなはずではなかった。たかが小娘とその友人どもが立て籠ってるだけだ。岩村たち十数人を差し向けるのも大げさだと考えていたのに。
奴らを見くびった？　まさか！
「隊長代理、妙な物が接近してきます」
車外カメラがいびつな瓦礫の山を捉えた。瓦礫は亀のようにゆっくり動きながら司令車に近寄ってくる。
「攻撃して排除しますか？」
「待て、正体も判らんのにみだりに動いてはならん」
そうこうしている間にも動く瓦礫は距離を縮め、ついに先端が司令車の鼻面をこすった。
ガガガガ。不快な音が司令室に響き渡った。画面では割れた屋根瓦や雨戸らしきものが司令車の前にうずたかく積もっていく。周囲の人垣は瓦礫の動きに合わせてよけていくが、司令車は側溝ギリギリに停車しているため、どうすることもできない。
「催涙弾を打ち込め」
「――やり過ぎでは？」
「尋常のやり方では二週間以内にリアルを全滅させることなど不可能。そう言ったはずだ。戒厳令にもかかわらずフラフラ出歩く平和ボケのヴァーチャルどもが悪いのだ。なんなら奴らをタイヤの下敷きにしてもいいぞ」

「――判りました」

司令車の側面が開き、白い煙を放つボール状のものが転々と路面にころがった。たちまち辺りにいた一般市民たちが咳き込み始めた。

目鼻を押さえて逃げ惑う人々の姿に、揣摩は驚きの声を上げた。

「催涙ガスか？」

車にのしかかった瓦礫は、半分がたこそげ落ちていた。おかげで周囲の様子を観察できるようになった。

「……トレーラーから発射されたように思えますが」

「そういやこのトレーラー、異様に大きいな。まるで装甲車だ――まさか迷彩服の……」

ズズーン。ついにすべての瓦礫が車の上から滑り落ちた。よくやったと揣摩は柳瀬の肩を叩いた。

「よし、長居は無用だ。スピード全開！」

「了解、ベルトの風車もフル回転です！」

柳瀬はグッと親指を立ててウインクした。

車は通りに出たところで右折すると、ゆるやかな坂道をまっしぐらに降りていった。昨日苦労して越えた踏切が車窓を過ぎていく。

「ひとまず助かったね」

むんは安堵のため息をつきながら、萠黄の髪を優しく

撫でた。
道路に小さなくぼみがあって、車体がわずかに跳ねた。
あおりを受けて萠黄の上体がぐらりと傾き、そのまま前席シートの間に倒れ込んだ。
「萠黄！」

〈第七章につづく〉